令和４年度　青少年育成関係団体懇談会

令和5年2月2日（木）　オンライン開催（ホスト会場：育成協事務室）

懇談会は、新型コロナの感染状況を踏まえ、オンラインで開催しました。

懇談会では、青少年育成の観点から危惧される課題について話題提供をいただき、参加団体でその情報を共有します。今年度は、一般社団法人ソーシャルペダゴジーネット代表理事 松田 考さんから「子ども・若者の居場所をつくる－地域を巻き込んだ若者や子育て支援の取組－」をテーマに話題提供をいただきました。その後、各団体から活動状況報告があり、情報の共有や連携・協力できることを再確認しました。

話題提供の要旨

■ 家庭や学校に左右されない第三の居場所

子どもたちが真に豊かに育つためには、放課後や余暇が家庭や学校と同じくらい大切だが、日本では家庭や学校の格差が余暇を直撃している。余暇は軽視されがちだが、家庭や学校・職場に左右されない第三の領域として、貧困や不登校など困りごとの「解決策」ではなく、そういう子ども・若者を取りこぼさないよう注意しながら、全ての子ども・若者の育ちを支えることができるものと考えている。

■ 街中に居場所を拡げる

子どもたちが心の蓋を開けて、大人に話してくれるまで、ゆっくり関わりあっていくところが「居場所」。“逃げ場所”にもなる。今の日本にそのような場所が学校以外にどれだけあるか。少なすぎないだろうか。家庭、学校以外の「居場所」を街中に拡げて、そこで子どもや若者とかかわっていく活動が、青少年育成活動だと考えている。

■「専門家」と「日常家」をつなぐ

「専門家」の相談室では、困難を抱える10人から相談があれば、その10人を救えるが、その約10倍の「相談したくない人」と出会えずにいる。専門機関は親を介さないと子どもの支援につなげられないが、児童館などでは100人の子どもと仲良くなれる。そうしたところで、子どもと日常的につながっている「日常家」が、プロフェッショナルとして子どもの気になる「SOSのサイン」を見守り、専門家と連携することが大事ではないだろうか。「青少年の健全な精神や活動の育成」と「困難を抱えた子ども達の支援」は繋がっている。

■ いとこんち

さっぽろ青少年女性活動協会が運営している「いとこんち」とは、親戚の家という意味。今の子ども達は、家庭生活体験が抜けている子があまりにも多い。そこで、「いとこんち」では市内の一軒家を活用し、「日常家」のスタッフが親戚のおじちゃん・おばちゃんのようにご飯をつくったり、いっしょに遊んだり、勉強を手伝ったり、夏休みに親戚の家に行くように過ごしてもらっている。日帰り里親というような形。「日常家」というプロフェッショナルが本気でおままごとをやれば、どれだけの子どもが育てられるだろうか。そのような思いで運営をしている。

参加団体・機関

○道小学校長会、道高等学校長会、道PTA連合会、道高等学校PTA連合会、札幌市学校教護協会、道少年補導員連絡協議会、ボーイスカウト北海道連盟、ガールスカウト北海道連盟、道YMCA、道子ども会育成連合会、さっぽろ青少年女性活動協会（11団体）

○北海道、北海道警察本部、北海道教育委員会、札幌市（４機関）